臨床経験

真武湯の圧痛点

The Trigger Point of Zhen Wu Tang

高木 嘉子

Yosiko TAKAGI

要旨 真武湯は少陰虚証の薬方であるが、少陰の葛根湯といわれるほどによく使われ、藤平健博士により『傷寒論』にもとづく併病理論が明らかにされ、臨床上その重要性が認識されつつあるが、慢性疾患の併病の状態の時期に一番多く使われる薬方でもある。しかし、その使用目標は自覚症状からが殆どであり、本方の腹候は、稲葉文礼氏の『腹証奇覧』に——「腹軟満にして、之を接せば悸ありて拘攣し、或いは、心下も亦悸して……」とある。

藤平健博士の提唱されている真武湯の自覚症状を目標に真武湯を使用した27症例に、臍左1～2横指附近に、放散しない圧痛と抵抗を認め、症状の改善と共に、圧痛、抵抗の軽減または消退を認めた。また2症例には、圧痛と抵抗を目標に真武湯を使用して、症状の改善と圧痛の消退を認めた。それは真武湯の腹候の一つとして有効性があると思われるので報告したいと思う。

緒言

今日、文明の発展、経済力の向上により冷えた水分（ジュース類、果物、飲料水、ビール等）の摂取や、冷暖房の完備により、水毒と裏寒形成の素地に囲まれ、陰病の存在は意外に多くなっている。少陰病の薬方、真武湯が頻用される時代になっているといっても過言ではないであろう。その使用目標は、殆どが自覚症状からであり、腹候は、腹力軟にして動悸を触知する、寺師睦宗博士は臍の左側2横指辺りに圧痛があると述べている。真武湯を使用した症例に共通した腹部の圧痛点（寺師氏と同様）を認めた。

方法

対象：平成1年4月から平成2年6月までの当院通院患者27名（男9名、女20名）を対象とした。

方法：藤平健博士の提唱による真武湯の自覚症状7項目¹⁾を基準に、真武湯を投与した。

- ①歩いていてクラッとする。或はクラッとする
 - ②雲の上を歩いているみたいで、何となく足もとが心もとない。或は地にしっかりと足がついていないような感じがする（浮遊感）
 - ③誰かと一緒に歩いていると、何で私に寄りかかるのかと言われたりすることがある（寄りかかり）
 - ④真っすぐ歩いているつもりなのに横にそれそうになる（斜行感）
 - ⑤真っすぐ歩こうとするのに横にそれる（斜行）
 - ⑥坐っていたり、腰掛けていて、ときにクラッとして地震かなと思う（地震感）
 - ⑦眼前の物がサーッと横に走るように感じるめまい感がある
- 以上の症状の一つでもあれば真武湯症の併存が

あるとみてよいと博士はいわれる。

圧痛の判定は表1のように定めた。

結 果

表2に示す如く、29例に検討を加えてみた。急性のめまいを主訴とする“かぜ”の3症例(25, 26, 27)では、主訴の消退までに3～4日圧痛の消失期間は5～7日であった。慢性疾患26例においては、主訴または自覚症状の項目の消退までに平均2ヵ月間、圧痛の消失期間は平均2.2ヵ月であった。また、その消退の仕方は、ある時は症状の改善に伴ってあとから圧痛も減少、あるいは消退し、症例(7, 10, 14, 15, 19)のように、圧痛の減少のあとから症状の改善が認められたものもあった。症例19においては、5週目に圧痛が消失し、7週目に自覚症状項目が消退し、さらに3週間続服したらまずくてとても飲む気がしないといわれ止めた。廃薬後圧痛の出現は認められない。また症例が少なく、今後検討を要するものであるが自覚症状の項目の一つもない2症例(28, 29)に臍傍圧痛の存在を目標に投与し、症状の消退、または軽減と共に圧痛も消退した。

腹部は腹力殆どが軟、あるいは中等度より軟であった。共通して図1の如く、臍の左横1～2横指に放散しない圧痛と抵抗を認めた。

症 例

症例1：67歳、女性

夜、外出した時、少し寒く感じ、しばらくして咽がイガイガし、帰宅後37.2℃あった。寒けとフワフワする感じ、クラッとするめまい感があり、すぐ床に入った。翌日になっても症状がとれず、来院した。

来院時所見：体格中等度、腹力中等度、脈弦やや沈、左胸脇苦満(+)、臍左2横指に圧痛(卅)、めまい感、フワフワ感、悪寒、臍傍圧痛から真武湯を投与。

経過：3日目咽頭痛(-)、悪寒(±)、フワフワ感(-)、臍傍圧痛(+).

7日目自覚症状すべて改善され、臍傍圧痛(±)を認めるのみであった。

表1 真武湯圧痛の判定基準

卅	触れて按じはじめただけで痛がり、顔をしかめるもの。
卅	軽く按じて痛がるもの。
+	ゆっくり深く按じて痛むもの。
±	ゆっくり深く按じて気持ちよいもの。
-	ゆっくり深く按じて痛みもないもの。

真武湯の圧痛点

図1

症例2：71歳、男性

主訴：月が流れる、目がまわる

現病歴：3年前、月を見て月が流れるのに驚き、いろいろ検査しても原因不明のまま経過した。2年前、草花に水をやる時、小廻りすると目がまわり、体がまわってしまうような感じがするようになり、治療を受けても何ら効果なく、あちこちの病院を転々とし最後の希みをかけて来院。

来院時：月が流れる、体のまわる感じがし、よく地震かなと思い、フワフワして地に足がついていない感じがする、真っすぐに歩こうとしても左へ行きそうになると、5項目の自覚症状を持っていた。体格やせ型、蒼白い顔をして年齢より老けて見える。冷えは自覚しておらず、貧血、嘔吐、下痢、動悸、頭帽感などなく、頭がうっすら重い(±)、脈沈、腹力軟、腹直筋緊張左右(±)、臍左横1横指に放散しない圧痛(卅)、臍下不仁(卅)。

治療および経過：真武湯を朝に、八味丸を夕に服用すること2週間、月の流れることがなくな

表2 真武湯の症例

症 例	性別	年齢	主 訴	自 覚 症状の 項 目	圧痛	主訴または 項目の消失 期間	圧痛の 消 失 期 間	併 用 薬
1.	♂	71	めまい	5	卅	10週(-)	12週(-)	
2.	♂	49	めまい・耳鳴り	3	+	めまい24週(-) 耳鳴り16週(-)	24週(±)	
3.	♂	61	めまい	2	+	2週(-)	5週(-)	
4.	♂	48	めまい	3	++	17日(-)	17日(±)	
5.	♂	65	耳鳴り・高血圧	1	++	14週(±)	14週(±)	黄連解毒湯
6.	♂	17	湿 疹	1	+	6週(軽減)	6週(±)	温清飲
7.	♂	69	白 斑	1	+	14週(軽減)	2週(-)	温清飲加減
8.	♂	33	湿 疹	2	++	11週(軽減)	11週(-)	桂枝茯苓丸
9.	♂	13	湿 疹	2	+	4週(軽減)	4週(-)	当帰芍薬散
10.	♂	17	にきび	2	++	20週(±)	16週(±)	当帰芍薬散
11.	♂	54	左腕の痛み	4	卅	6週(-)	8週(-)	治打撲一方
12.	♂	77	間歇性跛行	2	+	4週(-)	6週(-)	桂枝茯苓丸
13.	♂	62	背部痛	4	卅	6週(-)	12週(±)	
14.	♂	65	背部寒け	2	+	4週(-)	2週(±)	
15.	♂	36	涙 目	2	+	10週(±)	6週(±)	
16.	♂	39	胃のもたれ	1	+	3週(-)	3週(-)	
17.	♂	44	頻 尿	2	++	4週(±)	6週(±)	
18.	♂	62	残尿感	2	++	4週(-)	12週(-)	駆瘀血丸
19.	♂	53	腎不全・だるい	2	卅	7週(-)	5週(-)	八味丸・五苓散
20.	♂	65	腰痛・肩こり	1	++	8週(-)	10週(-)	八味丸
21.	♂	42	肩こり・頭痛	2	++	4週(-)	8週(±)	
22.	♂	65	物忘れ	2	+	12週(±)	8週(-)	釣藤散
23.	♂	68	高血圧	2	卅	16週(-)	18週(±)	
24.	♂	52	高血圧	4	+	4週(-)	12週(-)	
25.	♂	66	めまい・風邪	2	++	3日(-)	5日(±)	
26.	♂	60	めまい・風邪	3	卅	3日(-)	7日(-)	
27.	♂	74	めまい・風邪	2	++	4日(-)	7日(-)	
28.	♂	53	手足のむくみ	0	++	5週(-)	9週(-)	
29.	♂	55	乾 癬	0	++	8週(軽減)	6週(-)	

り、斜行感(+), 臍傍圧痛(+).

6 週間目めまい(+), 斜行感(+), 地震感(±), 臍傍圧痛(±).

10週間目めまい(-), めまい感(±), 地震感(±), 斜行感(±), 臍傍圧痛(±).

12週間目めまい(-), めまい感(-), 地震感(-), 臍傍圧痛(-)となった。

考 案

以上2例ともに、臍の左1～2横指に放散しない圧痛と抵抗を認め、症状の改善または消退により圧痛も弱まり、あるいは消退した。1例目は、感冒により真武湯の証を現わしたもので、7日で圧痛は消退した。2例目は、慢性に経過したもので、自覚症状5項目が認められ、12週間目には自覚症状も圧痛も消退した。

古典には、傷寒論の条文に「太陽病、発汗、汗出不解、其人仍発熱、心下悸、頭眩、身瞤動、振振欲擗地者、真武湯主之」「少陰病二三日不已、至四五日、腹痛、小便不利、四肢沉重疼痛、自下利、其人或欬、或小便利、或不利、或嘔者、玄武湯主之」と腹証について述べられてはいない。稲葉文礼氏²⁾は腹証奇覽に「腹軟満ニシテ、之ヲ按セバ悸アリテ拘攣シ、或イハ、心下モ亦悸シテ、時々目眩シ、身瞤動シ、或イハ、時々悪寒シ、小便不利、或イハ嘔スル者、又云ウ、此ノ証、四支疼重、或ハ沈重疼痛スル者間アリ、其ノ余何病ヲ問ワズ、前ニ云ウ如ク腹診ヲ詳カニシテ、現証時トシテ目眩、身瞤動シ、震々トシテ地ニ擗ント欲スル者ヲ眼トシテ、之ヲ用イテ其ノ効有ラザルコトナシ。

又云ウ、此ノ証ニシテ、腹底ニ寒冷ヲ覺ユル者大イニアリ」と云っているが、圧痛については語られていない。また、小島明有郷の聖剤発蘊には³⁾「胸状丸ク、大カカリニテ肉ヲモチ色白ク、ボツテリスル也、大腹ハ軟弱ノ中ニ少シク拘攣アリ。臍辺ニ至テ附毒を蓄へ、小腹マデ、グサグサシテ

濡ナル者ナリ、此ノ証瞤動甚シケレハ、張籠ノ虎ノ如ク、顔面ヲフル者アリ、或ハ、身体ユサユサトシテ、足ノ蹈ミトメナク、世ニヨイヨイト云様ナ者アリ」といづれも腹力軟にして少し拘攣があると述べられている。藤平健博士は⁴⁾「腹力は中等度よりやや軟または軟で、ときに軽度または中等度の心悸を認める」といい、矢数道明博士⁵⁾は「腹部は軟弱でしばしばガスのため膨満している」と述べ、寺師睦宗博士は⁶⁾「臍の左外側2横指の辺りに圧痛点を認める」と述べている。

寺師睦宗博士の圧痛点と私の認めた圧痛と抵抗は、ほぼ一致するように思われる。

結 語

真武湯の自覚症状7項目を目標に使用した患者において、臍の左1～2横指の辺りに放散しない抵抗と圧痛を認めた。また、本湯の投与により、圧痛の消退、あるいは軽減を認め自覚症状も消退した。

また、圧痛のみを目標に使った2症例でも、症状の改善と圧痛の消退を認めた。

これを真武湯の圧痛点と決めてよいかどうかは、皆様の御追試、検討戴ければ幸いと思う。

謝辞 この発表にあたり御校閲戴きました藤平健先生に深謝いたします。第42回東洋医学学会で発表させて戴きました。

文 献

- 1) 藤平 健: 漢方腹診講座, p.189, 緑書房, 1991
- 2) 稲葉文礼: 腹証奇覽, p.144, 医道の日本社, 1981
- 3) 小島明有郷: 日本漢方腹診叢書傷寒論系二, 聖剤発蘊卷上二, p.235, オリエント出版, 1986
- 4) 藤平 健: 漢方腹診講座, p.188, 緑書房, 1991
- 5) 矢数道明: 臨床応用漢方処方解説, p.295-296, 創元社, 1971
- 6) 高山宏世: 腹証図解漢方常用処方解説, p.152, 三考塾叢刊, 1988

(1991年8月19日受付)